

## 23. 臨床実習について：昭和58年～平成4年における保存修復学実習に関する研究(一般講演)(東日本学園大学歯学会第11回学術大会(平成5年度総会))

著者名(日)	舩潟 尚樹, 野田 晃宏, 荊木 裕司, 原口 克博, 川上 智史, 宮田 武彦, 大沼 修一, 横内 厚雄, 尾立 達治, 長岡 央, 飯岡 淳子, 笹淵 博子, 川嶋 利明, 松田 浩一
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	12
号	1
ページ	140
発行年	1993-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007873/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007873/</a>

### 23. 臨床実習について

—昭和58年～平成4年における保存修復学実習に関する研究—

舩瀧尚樹, 野田晃宏, 荊木裕司  
原口克博, 川上智史, 宮田武彦  
大沼修一, 横内厚雄, 尾立達治  
長岡 央, 飯岡淳子, 笹淵博子  
川嶋利明, 松田浩一

(歯科保存2)

歯学教育の特質は、臨床実習を重視し、これが体系的に、組み込まれているところにあります。臨床実習は講義で得た知識と技術を体験を通して身につけるのみならず、将来歯科医療に携わる者として不可欠な態度を体得し、倫理感を確立、患者とのコミュニケーション技術を習得するため特に重要である。

保存修復学臨床実習では1期生から5期生までは学生が担当医となる患者実習が主体であったが、6期生では見学が中心となり、患者と接した事が無いため、患者とのコミュニケーションのとり方や、一口腔単位で治療方針の立案、治療について訓練がなされなかった。そこで7期生より現在にいたるまで我々は、シミュレーション実習および相互実習を取り入れた。

今回、1期生から10期生にわたる臨床実習について評価を行うため、保存修復学実習に用いられているプロトコルを資料として検討を行った結果、いくつかの所見

が得られた。

(1) 保存修復学習の一人あたりのケース数は臨床ケース数について減少が見られた。

(2) 臨床実習ケースの修復別割合においては、アマルガム修復がなくなり、コンポジットレジン修復が増加した。

(3) コンポジットレジン修復ケースの窩洞別割合においては、V級窩洞が減少し1級窩洞が増加した。

シミュレーション実習および相互実習は、臨床ケース不足、ケース内容の不足を補う上では現在のところ良い成果を得ているがその反面、イフォームドコンセントが叫ばれているこの時代において、患者とのコミュニケーションの取り方を経験する機会が少ないという問題点もあり、今後これを補うことを考えていかなければならない。

### 24. 東日本学園大学社会歯科臨床研究所附属緑星の里歯科診療所開設以来2年6か月の診療状況について

道谷弘之<sup>1) 2)</sup>, 石井郁美<sup>1)</sup>, 森岡永吾<sup>3)</sup>,  
金澤正昭<sup>2)</sup>,

(緑星の里歯科診療所<sup>1)</sup>, 口腔外科<sup>2)</sup>, 社会福祉法人「緑星の里」<sup>3)</sup>)

従来より、精神薄弱者(児)更生施設や特別養護老人ホームなどの社会福祉施設では、通常の社会生活を営んでいる者に比べて、歯科医療が十分にゆきとどいていないことが指摘されている。近年、医療福祉に対する関心の高まりとともに、このような施設入所者に対する歯科医療や歯科保健活動が盛んになってきている。

社会福祉法人「緑星の里」は、複数の精神薄弱者および薄弱児更生施設や特別養護老人ホームなどを擁し、入所者の総数は300名近くに達する。平成2年8月1日に、緑星の里を中心とする施設入所者の歯科医療の充実を目的に、本学社会歯科臨床研究所附属緑星の里歯科診療所が開設され、週1回の診療を開始して以来、平成5年1

月で2年6か月が経過する。

そこで、今回われわれは、当診療所開設以来2年6か月の診療状況について検討を行ったので、その概要を報告する。

2年6か月間のうち診療日数は121日で、受診患者の総数は1516名、1日平均患者数は12.5名であった。このうち、新来患者の総数は224名、1日平均の新患者数は1.9名であった。

224名のうち、精神薄弱者(児)更生施設の入所者が136名・特別養護老人ホームの入所者が63名、その他が26名であった。

精神薄弱者厚生施設の患者の伴っていた障害では、精